

※「1 内容の整理」以降を現代語訳を参考にノートにまとめて提出せよ。

本文

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、持仏据多奉りて行ふ尼なりけり。簾少し上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いと悩ましげに読みあたる尼君、ただ人と見えす。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せられたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかな、とあはれに見給ふ。

清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるどころあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうち籠めたりつるものを。」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つけ。」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後ろ見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、「こちや。」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかき撫でつつ、「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかなうものし給ふこそ、あはれに後ろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またあたる大人、「げに。」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬまにかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、知り侍らで、ここに侍りながら、御訪ひにもまうでざりける。」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、簾下ろしつ。

「この世にのしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齡延ぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ。」とて立つ音すれば、帰り給ひぬ。

あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすき者どもはかかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、とをかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

日もまことに長いうえに、なすこともなく退屈なので、(光源氏は)夕暮れのたいそう霞んでいるのに紛れて、あの小柴垣のもとにお出かけになる。供の者たちは(都に)お帰しになって、惟光朝臣と(小柴垣の内を)おのぞきになると、ちょうどこの(目の前の)西に面した部屋に、持仏を安置申し上げてお勤めをする(それは)尼なのであった。簾を少し上げて、花をお供えするようである。中央の柱に寄りかかって座り、脇息の上に経を置いて、ひどく大儀そうに読経している尼君は、並の身分の人とは思えない。四十を過ぎたくらいで、まことに色が白く上品で痩せているけれども、頬はふくよかで、目もとの辺りや、髪が可憐な感じで切りそろえられている端も、かえって長いものより格別に当世風で気がきいているものであるよ、と(光源氏は)しみじみと心ひかれてご覧になる。

こぎれいな年配の女房が二人ほど、それから、女の童が出入りして遊んでいる。その中に、十歳くらいであるうかと思えて、白い下着に、山吹襲(の上着)などで着慣れて柔らかになつていゝる上着を着て走ってきた女の子は、大勢見えていた子どもたちとは比べようもなく、成人後(の美しさ)はさぞかしと思いやられて、見るからにかわいらしい容貌である。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして(豊かであり)、顔は(泣いた後らしく)手でこすってひどく赤くして立っている。

「何事ですか。子どもたちとけんかをなされたのですか。」と言って、尼君が見上げている顔立ちに、(その子と)少し似ているところがあるので、(尼君の)子であるようだ(光源氏は)ご覧になる。(女の子は)「雀の子を犬君が逃がしてしまったの、伏籠の中に閉じ込めておいたの。」と言って、いかにも残念だと思っている。そこに座っていた年配の女房が、「いつものように、うつかり者(の犬君)が、こういう不始末をしてお叱りを受けるなんて、本当に嫌なことですね。(雀の子は)どちらへ参りましたでしょうか、本当にだんだんかわいらしくなってきたというのに。鳥などが見つけでもしたら大変です。」と言って立って行く。髪がゆつたりとしてとても長く、見苦しくない人のようである。少納言の乳母と人が呼んでいるらしい(この)人は、この子の世話役なのであろう。

尼君は、「本当にまあ、なんと幼いこと。子どもっぽくていらつしやいますね。私のこのように今日明日と思われる命を、何ともお思いにならないで、雀を追い回していらつしやるとは。(生き物を捕らえるのは)仏罰を被ることになりますよいつも申し上げておりますのに、情けないこと。」と言つて、「こちらへ(いらつしやい)。」と言つと、(女の子は)膝をついて座った。顔つきが実にかわいらしくて、眉の辺りが(眉毛を抜いていないために)ぼんやりと煙つて、あどけなく(髪を)払いのける額の様子、髪の生えぐあい、とても愛らしい。(光源氏は)これから成人していく様子を見ていたい人だなあ、と目がとまりなされる。それというのも実は、このうえなく心を込めてお慕い申し上げるお方に、実によく似申し上げていることが、思わず見つめられる(理由な)のであった、と思うにつけても涙がこぼれる。

尼君は、(女の子の)髪をかきなでながら、「櫛ですくことを嫌がりなされるけれども、きれいな御髪ですこと。本当にたわいなくていらつしやるのが、不憫で気がかりです。これくらい(の年齢)になれば、全くこんなふう(に幼稚)でない人もありますのに。亡くなった姫君は、十歳ほどで殿(父君)に先立たれなされた頃には、しっかりと物の道理をわきまえていらつしやいましたよ。たった今にでも私が(あなたを)お見捨て申し(て死んでしまつ)たならば、どうやってこの世に生きておいでにならうとするのでしょうか。」と言つて、ひどく泣くのをご覧になるに

つけても、(光源氏は) わけもなく悲しい。(その女の子は) 幼心にも、やはり(しんみりして) じっと(尼君を) 見つめて、伏し目になってうつむいた時に、(顔に) こぼれかかってくる髪の毛が、つやつやとしてみごとに美しく見える。

これからどこで生い立っていくのかも分からない若草のようなこの子を後に残して消えていく露の身の私は、消えようにも消える空もありません。(死ぬにも死にきれませんよ。)

また(そこに) 座っていた年配の女房が、「本当に(そうです)。」と泣いて、

若草の生い立っていく将来のことも分からないうちに、どうして露は消えようとするのでしょうか。(それまでは生きていらっしやいませ。)

と申し上げているところに、(尼君の兄の) 僧都が向こうから来て、「こちらは(外から) まる見えではございませんか。今日に限って端近においでですな。この上の聖の所に、源氏の中将が、瘡病のまじないにおいでになったことを、たった今聞きつけました。たいそうお忍びでいらっしやったので、知りませんが、ここにおりながら、お見舞いにも参りませんでした。」とおっしゃると、(尼君は)「あら大変。本当に見苦しい様子を誰かが見てしまったかしら。」と言って、簾を下ろしてしまった。「世間で評判が高くていらっしやる光源氏を、このような機会に拝見なさいませんか。俗世を捨ててしまった法師の心地にも、すっかりこの世の心配事を忘れ、(見ただけで) 命が延びると思われるほどの(美しい) ご容姿なのです。さあ、ご挨拶を申し上げます。」と言って(僧都が座を) 立つ音がするので、(光源氏は) お帰りになった。

何とも可憐な人を見たことだなあ、こうだから、この色好みの人たちはただもうこのような忍び歩きをして、めったに見つけられないような人をもうまく見つけるといっわけなのだ、たまに出かけてさえ、このように思いもかけないことを目にするものだよと、おもしろくお思いになる。それにしても、実にかわいらしい子であったなあ、どういう人なのだろう、あのお方(藤壺の宮)のお身代わりとして、明け暮れの心の慰めにでも見たいものだ、と思う心が(光源氏の中に) 深くとりついてしまった。

## 1 内容の整理

□ 次の文章の空欄に、本文・脚注を参考にしながら適当な言葉を入れよ。(※本文は六段落構成だが、大きく三つに分けて示してある。)

○ 光源氏の垣間見〔初め〜二四・9／第一・第二段落〕

光源氏が僧坊をのぞくと、上品な〔①〕が経を読んでいた。ほかに〔②〕と子どもたちがいたが、中でも将来の美しさを予感させる〔③〕「歳ほどの少女に、光源氏は目を留めた。

○ 少女にひかれる光源氏〔二四・10〜二八・4／第三〜第五段落〕

少女は〔④〕「を逃がされて泣いていたが、その顔立ちが、ひそかに思い慕う

〔⑤〕「によく似ていたため、光源氏は思わず〔⑥〕「のだった。尼君は少女の幼さをたしなめ、行く末を案じて泣く。そこに〔⑦〕「がやってきて光源氏の滞在を告げたので、尼君たちは〔⑧〕「を下ろして奥に入った。〔⑦〕「が、光源氏に

〔⑨〕「しようにと言って席を立ったので、光源氏も垣間見をやめて帰った。

○ 少女への興味を深める光源氏〔二八・5〜終わり／第六段落〕

光源氏は、少女との出会いを喜び、〔⑤〕「の代わりに、身近に置いて日々の〔⑩〕「に見たいと思うようになった。

## 2 基本

1 次の漢字の本文中での読みを平仮名（現代仮名遣い）で答えよ。

- (1) 脇息 〔 〕 (2) 伏籠 〔 〕  
(3) 乳母 〔 〕 (4) 御髪 〔 〕  
(5) 僧都 〔 〕 (6) 消息 〔 〕

2 次の語句の本文中での意味を書け。

- (1) あてなり 〔一二四・2〕 〔 〕  
(2) なかなか 〔一二四・3〕 〔 〕  
(3) 今めかし 〔一二四・4〕 〔 〕  
(4) 心づきなし 〔一二四・14〕 〔 〕  
(5) めやすし 〔一二五・2〕 〔 〕  
(6) ものす 〔一二六・1〕 〔 〕  
(7) いはけなし 〔一二六・5〕 〔 〕  
(8) まもる 〔一二六・8〕 〔 〕  
(9) 後ろめたし 〔一二六・13〕 〔 〕  
(10) おくる 〔一二七・1〕 〔 〕  
(11) まうづ 〔一二七・13〕 〔 〕  
(12) ののしる 〔一二七・14〕 〔 〕

## 3 読解

1 「尼君の見上げたるに、少しおぼえたるどころあれば」〔一二四・10〕の意味として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 尼君が少女を見上げるのを見ると、二人は少し似ているので  
イ 少女を見上げた尼君の顔に、光源氏は少し見覚えがあるので  
ウ 尼君が見上げた少女の顔に、光源氏は少し興味を持ったので  
エ 尼君が見上げていると、少女は少し落ち着いたようなので

〔 〕

2 「心なしの、かかるわざをして」〔一二四・13〕とあるが、誰が、何をしたことを指して言っているのか、答えよ。

〔 〕

3 次の傍線部の主語を、それぞれ後から選べ。

- (1) ついゐたり。〔二二六・4〕  
(2) いとよう似奉れるが〔二二六・8〕  
(3) いみじく泣くを見給ふも〔二二七・3〕  
(4) 知り侍らで〔二二七・12〕  
(5) 見奉り給はむや。〔二二八・1〕

ア 光源氏    イ 少女    ウ 尼君    エ 女房

才 藤壺の宮 カ 僧都

(1) 「 」 (2) 「 」 (3) 「 」 (4) 「 」 (5) 「 」

4 「ねびゆかむさまゆかしき人かな」〔二二六・6〕と同様の内容を述べた表現を、これより前の本文中から十字で抜き出せ。

5 「涙ぞ落つる。」〔二二六・9〕とあるが、この時の光源氏の心情を説明せよ。

「 」

6 「かからぬ人」〔二二六・14〕とは、どのような人のことか。次の中から適当なものを一つ選べ。

ア 世話のかからない人 イ 物事をわきまえた人

ウ 身だしなみの整った人 エ 親元を離れている人

「 」

7 (1) 「生ひ立たむ…」〔二二七・6〕の歌と、(2) 「初草の…」〔二二七・8〕の歌にはどのような心情が詠まれているか。次の文章の空欄に適当な言葉を入れよ。

(1) 自分は少女を残して「①」ことになるだろうが、少女の「②」が

「③」でならない尼君の心情。

(2) 尼君に、「④」までは「⑤」

願う、「⑥」の心情。 「ほしいと

5

8 「あはれなる人を見つるかな」〔二二八・4〕とあるが、光源氏はこの人をどうしたいと思っているのか、答えよ。

「 」

9 本文中で女性の美しさを表すのに特徴的に取り上げられているものは何か。簡潔に答えよ。

「 」